

富士に祈る 67

國學院大學兼任講師 城崎 陽子



第二回三聖地巡礼・御寺泉涌寺(解脱会提供)

信仰と伝承 — 岡野聖憲・その21 —

先回は昭和十六年（一九四一）の聖憲の活動として、「真綿モル編」による産業指導の実践と、頌徳碑建立を取り上げた。そして、還暦を迎えた聖憲が、大地に種を播き、会員諸氏を導き、国家に奉仕できる人材を育てることへと、解脱会の歩みの重点を置くことを決意したまでを記した。今回は、戦局がいよいよ厳しさを増す中で、二回目の三聖地巡拝を行ったところまでを記す。

昭和十六年十二月一日、長期にわたって行われてきた日米交渉が、米國・ハル國務長官から提出された「ハル・ノート」を最後通牒として決裂し、対米英蘭戦を大本營政府連絡会議が決定した。そして、十二月八日の作戦開始日に日本軍がハワイ・真珠湾を奇襲攻撃したことによって、大東亜戦争が勃発したのである。

開戦直後の緒戦の成果にはめざましいものがあり、年が明けた昭和十七年（一九四二）一月には日本軍がマニラを占領し、続いてシンガポールを占領するという快進撃を続けていた。しかし、そうした戦況を踏まえたうえで、聖憲が強調したのは、「解脱行願の歩調を紊さず、一致団結以て大御心にそい奉り、一億民族の模範たる、其の襟度を堅持」することであった。

これは、大東亜戦争の目的を「亜細亞民族解放の自由の戦い」と位置づけ、その行為は「真の世界平和実現」を願った聖憲の理想に沿う、「天が与え賜うた機会」と考えたからであった。明治維新前後から国家のために殉難した人の霊を祀る、「埼玉県招魂社」（注・明治八年（一八七五）に発せられた招魂社の制による）が昭和十四年（一九

三九）に埼玉縣護國神社と改称されたことを契機に多大な寄付を行った聖憲は、同年に紺綬褒章を下賜されている。聖憲のこうした英霊に対する実践は、家族国家日本の国民がすべて天皇陛下を聖父と仰ぐ兄弟姉妹であるという発想に基づく。靖國神社社頭対面遺児慰問に向けた取り組みも、すべてこうした思想から自ずとなされたことであった。

さて、三月に入り、第二回目の三聖地巡拝の準備が始まった。昨年行われた、第一回三聖地巡拝で御寺泉涌寺への参拝が許可されたことは大きな前進であったが、問題は宿泊であった。戦局の改まった社会状況の中、往復に夜行列車を使うとしても、参加人数が六〇〇人に達しようかという事情を踏まえると、どうしても京都に一泊の宿を取ることが必要であった。しかし、現実的に考えてもそれだけの人数を収容

する宿を確保することは困難であった。しかし、聖憲はいち早く解決策を考えていた。それは、「御寺泉涌寺の塔頭に分宿を願う」ことであった。鎌倉・浄光明寺の大三輪信哉を介して御寺泉涌寺へ相談に赴いた聖憲は、一度は断られた「御寺泉涌寺塔頭への分宿」を椋本龍海長老の決断によって了承され、いよいよ実行の目途がたつたのである。ところで、聖憲は今回の巡拝に参加しないことを決めていた。なぜならば、「巡拝」は解脱会員が永遠に継続していかなければならない行事であると、考えていたからである。この行事を企画、遂行し、そのことで自らの心を深く認識させることが、聖憲の不参加には意図されていたのだ。

往復の夜行列車に巡拝団のための車両を連結し、米穀が配給制度となっていたにも関わらずに準備された「参宮弁当」を持って、列車に乗り込んだ

人々は一路伊勢に向かった。早朝七時に到着する名古屋では、中京地域の会員が夜を徹して朝食を準備していた。外宮・豊受大神宮、内宮・皇大神宮と巡拝を終えた会員は榎原神宮へと向かい、社頭に額づいた。そして、京都・御寺泉涌寺に到着した会員は雲竜院、悲田院、来迎院、観音寺、新善光寺、即成院の六ヶ寺に分宿したのである。翌朝、新緑の陽光のなか御歴代天皇御陵や靈明殿の参拝を済ませた会員は、続いて最終目的地である醍醐寺へと向かった。柴燈護摩が厳修された醍醐寺で、「醍醐の春」を満喫した会員たちは再び車上の人となり、各地へと別れていった。帰京して東京道場へと向かった会員は、羽織袴姿の聖憲に迎えられる。

宗教、我等の信仰であるを實踐せられた会員に於ける、志標完全に認識出来たこの事業」と記している。聖憲自身が参加しない三聖地巡拝の意義は行事の「継続・継承」にあり、そのことを自覚できるか否かに解脱会の信仰の未来がかかっていたのである。第二回目の三聖地巡拝はその目的を十分に達したといえよう。三聖地巡拝を無事に終え、聖憲が考える解脱会の継承を形として実現できたことと実感したところ、日本は初めてB29による本土空襲を受けた。次々と伝えられる戦報報道に湧いていた国民は驚き、陸・海軍に与えた衝撃ははかりしれないものがあった。配給制が一層強化され、昭和十六年八月三十日に発令されていた金属類回収令（勅令第八三五号）が、昭和十七年に入ると徹底して行われ始め、寺院の仏具や梵鐘に對しての回収が強制されていたのである。

釋尊の御心は
多量に
32
句・菅谷秀文

● 小 仏教の特徴示す三法印

諸行無常
諸法無我
涅槃寂静

この世にあるものは、永遠にあり続けず、変化し続けてしまい、儚いものである。全ての存在しているものは、因縁によって生じており、それ独自で存在しているものはない。あらゆるものは、他のものとの関係によって条件づけられ、制約されているから自立存在でない。このことを無我という。

涅槃寂静
涅槃とは輪廻の苦を抜け出した安楽な境地をいう。煩惱を滅しきって心が全く乱れず、静まりかえっている。これを寂靜という。釈尊は迷える生きとし生けるものを涅槃寂靜の境地に向かわせる為に、様々な教えを説いた。